

巻頭言

おとしびみ特集

「おとしびみ特集号に寄せて」



ホシフミの振簾

小堅洋

或るゾウムシの種類の所謂振簾を子供達の爲に作って切落していたところ、それがなんと古く我国社会に見られたおとしびみなるものと形が似ていると云うので日本人からそっくりその名を和名に戴いてしまった。彼にとってはうでこそないけれども、その一つは子孫達の爲に、宝石よりも大切なものである。本誌「すすむ」が命名された時、同時に候補にあげられていた「おとしびみ」は絶賛の拍手を浴びつつ短報欄の名前として永久に用いられる運命となったのである。毎月寄稿される短報の一つ一つは張本人の振簾に負けず劣らず貴重であり、後進に対しては残された価値ある記録であり、更にそれは内容こそ違えどふみであることに変わりはないのである。私はこれを新昆虫のムシペンと共に、まさに要を得たる命名だと思っている。短報欄は紙上を色取るダイヤモンドである。採集の機会に於いてのみ得られる貴重な観察、介布記録、苦心した調査の

小飼、生理生態観察、実験結果の紹介、見解等あらゆる学
向の分野にわたっての記録の園である。短かくてもびりっ
と辛いこれらは精密機械の部品に似ており、集積の結果が優
れた研究の源となることも稀ではないようである。中にはだ
らだらとした報文をものぐ程、貴重なものもある。

しかし本誌のおとしぶみに現われる記録はもとよりムシペ
ンのそれの如く優れたものばかりの集録だとは云えないで
あろう。この事は本会がかなり小地域に限られ、会員も殆
んど本地方の方を中心としているので寄稿される方の中には
小学生、中学生の人、まだ研究を始めて向かない人達も生
然居られるわけで全く無理のない話である。けれども私は
このような初心者を多く含めた小さな会では例えそれが既
知の事実でありつまらぬものであろうとも、確実に注意を引く
ものでありさえすれば、お互が楽しみ、知見を交換し親睦を
増すと云う目的には充分であると考える。現在では別に研
究発表の場である会報が出来たのだから、本誌の性格とし
て小報文や随筆等と共におとしぶみが大きく紙面を占
領してもよい様である。私は毎月ムシペンを見るのと同
じように楽しみにしておとしぶみを愛読している。だが
今迄小数の寄稿者に限られていたことは非常に遺憾に
思っていた。今度広瀬義躬氏の編集でおとしぶみ特集
号が企画されたのは真に有意義なことでこれを機に寄

橋される方々(特に小・中学生の方)が増すならば実に喜ばしい限りだと思ふ。最後に今後の“おとしづみ”の健全な生長を祈って筆を置きたい。

＝倉敷産ボシミスジの廣瀬義躬 食草と周年経過について＝〔予報〕

本種 *Nyctis nyctis* BUTLER は本州、四国、九州の各地に分布するがその分布は局部的であり他地方に於いては本種は山地性の性質とあらわすものであるが当地倉敷附近一帯の純然たる平地に於いて特に郊外附近に多く市街地に於いてもその姿を見ることも少くない。この様に当地では本種がかなり普遍的な分布を示すところから筆者は年に1度昨年(1951)より倉敷の各地に於いて本種の生態を観察又飼育を行つて来たのでここにその生態の一端を報告する。本文を草するに当って食草の同定を賜つた古屋野寛氏及本種についての種々の知見を寄せられた近藤光宏氏、発生経過について資料を提供された小野洋、青野孝昭氏に深謝の意を表する次第である。

I) 食草 — 従来文献に見られた如く本種の食草はイバラ科(RUBIAEAE)シモツケ属(SPIRAEA)のもので当地に於いて現在迄に判明したものは次の三種である。()内は発見地名を示す)

4 (45)

1) ユキヤナギ *Spiraea Thunbergii* Sieb.
(倉敷市記之上)

2) シジミバタ (= ハゼバタ, コゴメバタ) *S. japonica* Sieb. et Zucc. (倉敷市川西町)

3) コデマリ (= スデカゲ) *S. cantoniensis* Lour.
(倉敷市住吉町) (板野 1948 による)

古屋野氏によれば倉敷産 *Spiraea* は上記3種にシモツケ *S. japonica* L. fil. を加えたものであるが本種は他地方でも記録されているので食餌とすることは確実である。

II) 周年経過 = 当地方に於ける本種の発生は年2回

月 世代	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1st	L	L	L	L	LPA	LPA	A					
2nd						EL	ELP	LPA	A			
3rd								EL	L	L	L	L

倉敷産ホシミスジの周年経過表

である。従来文献で年一回の発生と記されているものが多くあるがそれは空地及小地に於ける経過であって、当地の如く暖地に於いては年2回発生が常態であろうと思う。すなわち越冬中の幼虫は4月上旬・中旬に至り越冬より覚め後2回脱皮して5月上旬—6月上旬蛹化

5月下旬よりその発生を見る。(初見 1952. 5. 18 鶴形山・近藤光宏氏) 6月中旬以後に産下された卵は6月下旬-7月上旬に孵化し幼虫は速やかに成長し7月下旬-8月上旬にかけて蛹化、8月上旬-8月中旬にオニ回の発生をみる(終見、1947. 7. 7 鶴形山、小野洋氏) オニに成虫より産卵され孵化した幼虫は以後緩慢に成長を続け2回脱皮、秋期(10月)に至り中脈先端の葉片を筒状にまいて(オニ令ニ令の幼虫の示すものと同じ)その隠れ家にて3令幼虫で越冬以後の経過は前記の如くである。

オニ化のものは蛹期約19日オニ化は必ずかに7日であつてゴダラキョウ等に見られる如く2化のものは1化に比して1/10小形である。オニ化の飼育記録は下表の如くであるがオニ化の飼育の1例を示せば1/Ⅷ産卵 2/Ⅷ孵化 3/Ⅷ蛹化 4/Ⅷ羽化で卵期6-7日 幼虫期20-23日 蛹期7-8日で産卵後約一ヶ月で成虫を生じる。2化のものは多くない。本種はその経過が個体によりまちまちでその出

1952年度オニ化飼育例

No.	1	2	3	4	5	6	7
前蛹	23/Ⅷ	30/Ⅷ	1/Ⅷ	2/Ⅷ	2/Ⅷ	7/Ⅷ	13/Ⅷ
蛹化	30/Ⅷ	2/Ⅷ	2/Ⅷ	4/Ⅷ	4/Ⅷ	9/Ⅷ	13/Ⅷ
羽化	1/Ⅷ	17/Ⅷ	20/Ⅷ	20/Ⅷ	21/Ⅷ	24/Ⅷ	30/Ⅷ
蛹期		17	18	16	17	15	
備	住吉町(株)	住吉町(株)	住吉町(株)	住吉町(株)	住吉町(株)	住吉町(株)	住吉町(株)
(性)考	死亡	♂	♀	♀	♀	♂	死亡

現もかなりのズレを生じ、
い巾を持つ。本種の詳細
なる生活史については近々
発表いたく考へて居る。特に
越冬及分布に關しては別
稿を起す予定である。

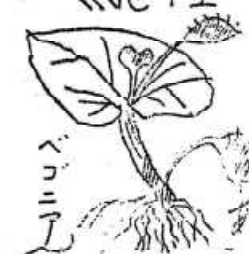
6 (4P)

注) 周年経過表にて A 成虫 P 蛹 L 幼虫 E 卵を示し斜体の L は幼虫が越冬中であることを表す。

◇ 総社町附近に於ける [春季]

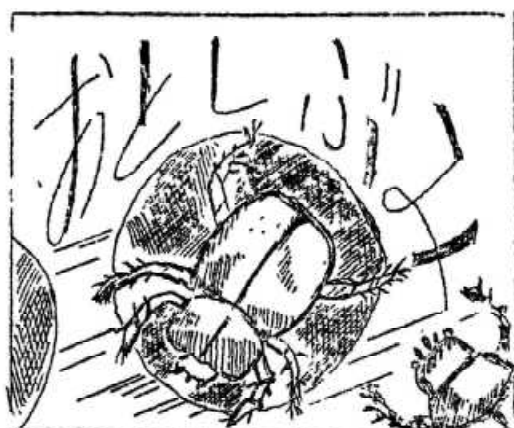
本年の蝶の初発 ◇

水野弘造



これは広瀬さんの方からまとめて発表される事で
あらうが、一応今迄の記録を僕から御知らせしよ
う。そのものはあまりはつきりしないが、話を聞いてた
いた向道いはなとそうなるものである。番号は発見した順序を
示す。採集は採目撃は目で表わす。

種名	頭数	初発日	場所	発見者
1) キタヨウ	(1)?	2. 29	総社 西中学校	荒木(目)
2) アカタテハ	(1)	3. 3	— 西中学校	歌村(採)
3) キタテハ	(2)?	3. 9	— (神左) 八代	塩見(目)
4) モンシロキヨウ	(1)?	3. 9	— 田町	瀧本(目)
5) テングキヨウ	(1)	3. 9	— 田町	水野(採)
6) ルリタテハ	(1)	3. 16	清音 黒田	水野(採)
7) ヒオドリキヨウ	(多数)	3. 17	山手 福山	水野 歌村(採)
8) ツバメ	(2)	3. 21	総社 内田	歌村(採)
9) ルリシジミ	(2 幼♀)	3. 21	— 内田	歌村(採)
10) スジグロキヨウ	(1 ♀)	3. 26	— 内田	歌村(採)
11) ベニシジミ	(1)	3. 26	— 内田	歌村(採)
12) ミヤマセセリ	(1 ♀)	3. 26	— 内田	歌村(採)
13) モンキキヨウ	(1 ♀)	3. 26	— 内田	歌村(採)
14) ヒメアカタテハ	(1)	3. 26	池田 豪溪	水野(目)
15) ムラサキシジミ	(数頭)	4. 1	総社 内田	歌村(採)
16) ツマグロキキヨウ	(2)	4. 3	— 内田	歌村 水野(採)
17) ツマキキヨウ	(1 ♀)	4. 3	— 内田	歌村(採)
18) ウラギンシジミ	(2 ♀)	4. 5	池田 豪溪	水野(目)
19) アゲハキヨウ	(2)	4. 6	総社 内田	歌村(採)
20) ツバメシジミ	(数頭)	4. 11	— 内田	水野(採)
21) キアゲハ	(1)	4. 11	— 西中学校	歌村(目)



コクゾウに対する Marshall 卿の見解

コクゾウ *Celandra sawakii* TAKAHASHI はコクゾウ *Celandra oryzae* L. と共にわが国に於ける貯蔵穀物の重要な害虫であつて、形態はコクゾウとよく似ているがその大きさはコクゾウに比較すれば著しく小さくて体長はコクゾウの凡そ $2/3$ 、即ち

2.5—3 mm であるに過ぎない。コクゾウは單に体が小さい許りでなく、その習性並に生理的性質においても又かなりコクゾウとは異つてゐる。

本種は明治32年徳川忠次郎博士に於て著「日本農作物害虫論」に於いてコクゾウ *Celandra oryzae* (四紋小米象), *Celandra oryzae* var. *minor* Sawaki として發表されたもので、本邦では北海道にもいるが主に東京以西の西南日本に広く分布して貯蔵米の害虫としてコクゾウとならんで有名である。高橋契博士は大正7年以來コクゾウに関する研究に從事し、殆どわ

22) クロアゲハ	(18)	4/9	総社・田町	水野(採)
23) ヤマトシジミ	(18)	4/9	——・内田	歌村(採)
24) コミスジ	(1)	4/9	——・内田	水野(採)
25) キマダラヒカゲ	(数頭)	4/9	——・内田	水野歌村(採)
26) ヒメウラナミシヤバ	(1)	4/9	——・内田	水野(採)
27) アオスジアゲハ	(1)	5/4	——・内田	歌村(採)
28) ヒメシヤバ	(1)	5/1	——・内田	歌村(採)

♪ (50)

は本種はコクゾウのノ変形にすぎないと言われたが、その後試的研究が進むに従い最初抱かれていた考えを変更し、形態的にも生態的にもコクゾウとは異ったものであるとし、昭和二年「作物害虫論」において本種につき新種の記載をし、*Calandra sacalis* TAKAHASHI とした。

高橋博士の研究を機として、この後大小両種に関する生理生態学的研究が今日迄多数の人によってなされてきたのであるが、結局この近縁な二種の穀象相互間において物理的及化学的諸刺激に対する反応に顕著な違いがあることが判明した。

筆者はわが國のコクゾウに対して外国の分類学者が如何なる見解を抱くかを知りたく昨年末に岡山産のコクゾウ及コクゾウの標本を象鼻虫類特に *Calandra* 属の専門家である

現大英博物館昆蟲部の Sir Guy A. K. Newell (卿) (元英国王立昆虫学研究所長) に送り同定を依頼した。之に対して早速返事を貰ったのであるが、同卿の意見として筆者が送ったコクゾウは典型的な世界共通種の *C. oryzae* であり、又日本の所謂コクゾウと全く同じ小型の穀象は特に熱帯地方に多く分布しているものであって、この両者の間には大きさの違い以外には新に種の分化を立證すべき何等の區別も発見されないから、コクゾウに対して特に *C. oryzae* とは別の学名をつける必要はないがもし使うならば佐々木博士の記載した *C. oryzae* var. *minor* とすべきであると云う回答であった。

(安江安宣)

26) シルヴァイアシジミ (2♂♀) 5/11 総社・内田 歌村(採)
30) コクゾウバネセセリ (2) 5/11 ——— 内田 歌村(採)
清音 黒田 水野(採)
31) ツマクロヒョウモン (1♀) 5/12 総社・西中学校 水野(目)

大体以上であるが、この内クロアゲハはそれより数日前の報告が(目撃)歌村君からあったが僕の牛落ちて日附けをなくした。それでした。かなものをあげた次である。

＝熊山附近の蜻蛉＝

1952年5月2日 稼で計
画中であった和気郡熊山附近
に蜻蛉類の採集に行く機会
を得たので確認し得た種類
と参考迄に報告する。又調査
の主眼であった *maculipennis*
群についてはフタスジサナエ
は何れの地にも見うけたが
タマサナエは万富、オグマサナエ
は香登、伊部等に見られた。

- 1) シオヤトンボ (目認)
- 2) シホカラトンボ (目認)
- 3) ベッコウトンボ (採集)
- 4) トラウトンボ (採集)
- 5) タハサナエ (採集)
- 6) フタスジサナエ (採集)
- 7) オグマサナエ (採集)
- 8) サナエモドキ (採集)
- 9) *A. n. n.* (目撃)
- 10) カワトンボ (目認)
- 11) オオイトトンボ (採集)

(安東 瑞夫)

＜岡山県下に於ける

ムカシトンボの産地＞

本県下に於けるムカシトンボ

Erythemis argyrea

の産地は朝比奈

氏の稗説[※]にも記録されてい
ないのでここに既知の産地
を記しておく。

1) 真庭郡勝山町神庭(神庭
瀧附近)

2) 阿哲郡草間村棚瀬(不
動瀧 或は絹掛瀧附近)

1) では年々ゆずかであるが
採集されているようである。

2) では 1/VI-1/147 頁1頭
の採集記録がありこれが県
下では南限に当る。

以上2つの産地は県内の虫人
には知られている様であるが
ギフチョウと同様中央へ公表
されないのでもその他の種類と
共に本県下の記録は多く集
録されていない。本県のフォ
ーナが未解明であるというのも
その一部はこんな所から来て
いるのではないかと思う。

今後其本県のフォーナが絶々
中央へ発表されることが望しい。

注) 本県下のギフチョウについては小野
洋氏が報告されている 新昆虫(4)

(広瀬 義躬)

“イワタマルハセイボウ

を神庭で採集”

1952年5月18日、真庭
郡勝山町神庭に採集行を

1/1 (52)

試みた際、葉上に飛来した
Chrysis (*Hemichrysis*)
habilis *Eursson* (1977)
 のワタメルハヤシボウ?と思われ
 けしものを採集した。本種の分
 布は日本、朝鮮、北支(熱河)
 (山西)である。本県での一記録
 として報告しておく。標本は近
 藤氏に保存していただくこと
 した。尚本種の学名として従来
 使われて来た *Chrysis* (*He-*
lichrysis) *curvata* *T.*
OSAWA は前記学名の *sy-*
nonym とのことである
 (小野 洋)

ア カスジキンカメセ

1952. 5. 30 東京方面へ
 旅行中でこれはその途中運
 良く採集したもので鎌倉の八
 万様の右手にあるツバキの木
 の葉上に丁度雨畦の様なか
 りで静止している本種 *Pae-*
lecoris leucon *DIST*
ANT を筆者目撃、ただちに用
 意していた毒ゲンにおさめた。
 これは平山修次郎、松村松
 年両方々の昆虫図譜によれば
 本種は七月頃日光、熊の平、
 等の山地に発生すれども少な

いと書かれていた様に珍種
 的価値があるので報告しておく
 なお図譜には山地と出ている
 が採集した場所は山地で
 はない。以上 (近藤光宏)

糸 外少ない シロスジコガネ

シロスジコガネ *Granida*
ululimata *Motschls*
 KYは北海道、本州、九州、
 琉球に分布し、茶褐色の地
 色に白色縦線をあらわした美
 しい翅鞘を持つ甲虫である。
 毎年開催される生徒児童の
 昆虫標本展でも当地で採集
 された個体は殆んど認められ
 なかった。牛元には一握りの
 記録を持っていないのが残念
 ではある。筆者個人の記録
 によると、1943年の夏、北
 沢町の松宅二階窓にイモが
 飛来したのを捕獲して以来
 絶えて採集したことなく、
 1950年6月23日に至り酒
 津で1匹採集することが出来
 たのみである。今年は注意
 して本種の発生状態を観察し
 たいものである。

関東地方では海岸地の松林などに多いそうであるから、当地でも松林で予想より沢山みつかるのではないかと思います。(青野孝昭)

『羽島山にミヤマカミキリ』

先日4回学徒博物コンクールが行なわれた際、倉敷東小学校5年生西藤浩之君の標本中に羽島山のラベルのついたミヤマカミキリを発見した。

羽島山 1951. 8. 20

西藤浩之採

本地方に於いては現在迄に鶴形山以外での記録は見当らないので一応報告しておく。



(小野洋)

イカリモンが豪溪に多産

蝶によく似ている蛾として皆に知られているイカリモンが *Pseudaeschna felderi* BREMER を豪溪で多数見たので御知らせする。4月5日、ムササビバメを目的に豪溪へ行くと、こゝイカリモンが多数飛んでいた。始めはベニシジミの様な蝶が飛んでいるなと思って何気なく採ったのが、それが以外にも本種であった。珍らしく思っ、て三角紙に入れたのだが歩いていくところでも飛んでいる。採集したのは2匹だけだが見たのはおそらく10匹以上である。本種は図鑑によると各地に普通なもの様であるが、総社所附近ではまだ見たことが無いものだった。

倉敷昆虫同好会会報(刊) 創刊!!

内 容 No. 1 1952

- ◇ 巻頭言 ママナエヲオ 深谷昌次
- ◇ 岡山ノメマトイ 小泉憲治
- ◇ 青色螢光誘蛾等に対するコノガムシの超光性活動とその気象因子に関する小調査(予報) 小野洋
- ◇ ニルニ、蛾虫の休眠(講演要旨) 中塚憲次
- ◇ 倉敷市附近の天然記念物 佐藤清明

定費 30.00 頒布 千 5.00

12 (54)

春休みにあった談話会では
広瀬さんは福山附近で2
頭得られたとのことであつた
がそれにしてはあまり多いも
のではないようだ。

又本種の発生期は旧日本昆
虫図鑑によると4、5、6、7
月だそうだが、その日採つたの
は2匹とも色があせていた。翅
も多少はたんていたので冬を
越すのではないかとも思つて
いる。あまり面白い事ではな
いが一応ここに御知らせしま
す。(水野弘造)

総社町に於ける

今春のシルグアイシジミ

去年秋総社町内田(櫻谷)で
シルグアイシジミ 1 頭を記
録したことは先に御知らせし
た通りであるが今春又同地
で2頭発見されたので御知
らせよう。場所は同じく櫻谷
であるが前に採集した所と
少しはなれた所である。すな
わち、今年5月11日(晴)歌
村晃一君(総社西中学校
3年生)が近所の小学生達と
櫻谷へ蝶を採りに出かけた
ところ、シジミが2頭飛んで
いたので採ったら、それが旧頃

僕から調べる様に云つておい
たシルグアイシジミだったので
大喜びであつたそうであるが
丁度三角紙がなかったので
一旦そこに置いて家へ三角
紙をとりに帰ったとのこと。
家はすぐ近くなのですぐ戻
つたのだそうだがこの2、3分
の間に既に1頭(雄と
雌を1頭づつとつたのである)
は蟻にやられてしまつていた
ので捨てたが今は完全に
標本にしていた。これで総
社町のシルグアイシジミは3頭
にのぼつたが、位置が違ふ
ので櫻谷では各地に分布
しているのではないかと僕は思
っている。又この2頭は今年
の初発でもある。1か1櫻
谷でシルグアイシジミが多数
発生してもこれとよく似ている
ヤマトシジミの数もおびただ
しいのでシルグアイだけを採らう
とするのは一寸困難なことで
あろう。(追記)後日(5/18)
又も同じ場所で(1♂1♀)2
頭が歌村君によって採集さ
れた。11日に採集した所と同
じであると言うからおそらく
ここに食草があるにちがいない
だろう。(水野弘造)

春季の指標としての

ハンミョウの出現

季節的指標としての昆虫は多くとりあげられているようですがこのハンミョウ (*Chironomus chinensis* DEGEER) の出現も春爛漫の季節を示すものとしてとりあげられてもよいのではなかろうかと思ひます。もっとも全国的に見れば北方迄は分布せず早くも東京附近で稀なものとなるのでモシロキョウの如く普遍的ではありませんが(当地方では平地(純然たる平地)には産す一般の人々の

年次	初見日	場所	発見者
1947	13/4	倉敷市小黒田	(小野 青野)
1948	5/4	"	(青野)
1950	6/4	倉敷市西津木門	(広瀬)
1951	8/4	清音村黒田	(小野 悦)
1952	5/4	西津木門、黒田	(広瀬 尾崎山畑)

ます。今後諸氏もこの方面に多少其注意を向けられんことを希望します。終りに資料を提供された小野洋 青野孝昭 尾崎年房らの諸氏に厚く御礼申し上げます (29/4-1952) (広瀬 義男)

目にふれる機会も少く、すがすがしい山がかりと美しい特徴ある飛翔をする本種に多数接します。倉敷附近で山地には極めて普通なものですから春季指標の昆虫として当地では注意すべきでしょう。次に私が集めました1947年以降の記録を記します。ただし1947/1948年2年は観察者少くない様で不完全なものはまぬがれませんが大体の傾向は察知出来まよう。

いずれも4月上旬頃の出現で、前年特には6/4頃の記録が多い様です。本種の終見日の調査も興味あるものと思ひ

シロヘリカメムシ

Aenaria lewisii

SCOTT シロヘリカメムシの生活史は未だ充分判っていないようで、その羽化期について色々報告されており、

14 (56)

冬、5月頃と云うのも見られる。筆者は去る10月5日、兎島半島のタツラ山へ採集を試みた際、*Scutiger* により2個体を得た。同伴の友人も採集していたようで、既にかなり羽化していたものと考えられる。現在迄考えられていたより比較的早い発生のように思われるので一応報告しておきます。(小野 洋)

成虫越冬の カメムシ 2 種

I) アオモンカメムシ *E. nivosus*
Stethus humeralis Takahashi, 1955 本種の越冬は成虫で普通常緑樹の茂みで行われるものの様である。* 筆者等は、1955/倉敷市田之上の自宅庭内のヤツデの樹幹裂目に越冬中の本種1頭を採集している。

ちなみに本種はヤツデの花に飛来するものである。又近藤光宏氏は本種をエノキの樹皮下に越冬中を採集されたと述べている。

2) ツキカメムシ *Macrostus japonensis* Scott 1924 当地に於ける本種は割合珍らしいものの様である。

1) 筆者は 1955/倉

敷市田之上の自宅の縁下より土中に棲息する本種成虫及幼虫多数を得ている。越冬態は成虫で行うものの如く 1955/自宅庭内の石下にて数頭を得ている。越冬場所は土中で春季になり気温が上昇すると地上近く或いは地上に現れ始めるのであろう。本種の生活史は未詳らしいが筆者は上記の如く多少観察することが出来たので今後更に観察を続け又機会が有りたら発表したい。

(1955/1956) (広瀬義躬)

ミノムシの蛹化率

ツキを食草とするミノムシ(ヤノミカ)と思うがまだ成虫を見ていない。)を4-5日の間に解体して蛹化率を調べてみた。先ず産卵された卵数E/100と野外であれどその孵化率は大体40%以上と思う。数十ヶを5月上旬に解体して内部を調べた。生きていたものは大体全体の1/5でその中3/5が蛹化、2/5が幼虫であった。残りの中1/5が寄生され2/5が蛹又は幼虫で死亡して居り1/5は空であった。これからみ

て110ヶ月中完全に蛹化するものは15-20ヶで他は寄生(ハリバエ科)の1種

5月上旬羽化しや死亡(食害、越冬中死亡、病死など)

などで他の *Leptocryptus* の飼育経験からみて羽化するものは10-15%であることが検定される。このような結果であるか野外では死亡率が如何に大であるかが判る (西村公夫)

トビモンオオエダシマクの

食草に関する小観察

3月20日大阪府枚岡公園で1子を採集22~23日の間に大卵塊を産んだ。

4月16-17日に殆んど全部孵化、手近にある樹葉の若芽を与えてみた(鳥取にて)食ったものアベニキ、ヤマザクラ、ソメイヨシノ(*Prunus serrulata*)、モモ、イバラ、エノキ、食はなかったものクマゲ、サカキ、イタヨウ、カエデ(2種)、クワ、クス、イヌグス、グミ、クコ、センノキ、ネズミモチなどで其れ他クマギ、ヒサカキ、リンゴ、ナシ、ミズナラ、コナラ、サクラ sp、ナヤ、ミズ



キ等を食した記録がある。

井上寛: 日本産尺蠖科の食草目録による 1952. 宝塚昆虫館報 No. 74 (西村公夫)

トンボの共食数例

トンボ同志の捕食はよく見受けられるが、最近私が観察し得たものを拾って見る。

観察はいづれも勝田町真加部内に於いてである。

1) カトリヤンマ♀がカトリヤンマ♀を被害者は既に左前翅左前、中胸が失われていた。(1951. VIII. 12)

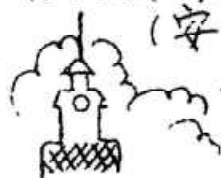
2) キイトトンボ♀がホソミイトトンボ♀、頭部前胸が食われていた。(1951. VIII. 15)

3) キイトトンボ♀がホソミイトトンボ♀を捕食した時つかまえる。(1951. VIII. 15)

4) シホカラトンボ♀がオニイトトンボ♀を捕食しているのに遭遇(1951. VIII. 27)

5) ヤマサナエ♀がタバサナエ♀を捕食していた。(1952. V. 17)

(安東瑞夫)



二二一

新藤氏一等(市長賞)水野氏(三等賞)詳細は次号に発表予定 (H)

○ 本会では先に博物コンクールに一等賞を得られながらも発表されなかった近藤氏の発表を中心に夏休みに1回研究発表会を開催する予定です。今から発表を用意しておいて下さい。(H)

津山東中洋

倉敷昆虫同好会